
雷狼竜として生きた者の物語

龍竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雷狼竜として生きた者の物語

【Nコード】

N2886Z

【作者名】

龍竜

【あらすじ】

ある人間が神のミスで殺されて、転生する所謂テンプレって奴です

主人公は雷狼竜として生きる物語です

けっして最強ってわけではないですが、かなり強いです

プロローグ（前書き）

ただでさえ、更新速度落ちてるのにやりやがりましたよ俺

まあやろうと思った理由は、モンハンのモンスターになりました系の奴でジンオウガの奴が見えないと思い、やりました。後悔はしてるけどやっちゃったもんは的な感じでやります

ブローグ

ここはどこだ

目の前は完ぺきな真っ白で、なぜここにいるのかすら理解できない歩きたそうと思うけど動かない、腕を動かそうとしても動かない動くのは目と首だけ

何にもできないと思い、ここに来る前のことを思い出す

俺はたしか、いつも通りの学校で、部活を終え速く帰りたい一心で自転車を飛ばしてた。

そして俺はいつもは通らない人気のない道を通っていた
そこが近道であることと人あんまりいないから自転車を飛ばす絶好の場所だった

俺は近道を通り終え、信号を見て道路を渡ろうとした

しかし、渡ってる最中に大きな地震が急に起きた
そう、あまりにも急な地震で明らかに震度5ぐらいなのがわかる
周りの車は急停止したが、あんまりにも急すぎてパニックになった車があった

その車は俺に向かってきていて、俺は強い地震のせいで動くことができない、しかしなぜかその車はガンガンとスピードを上げている
そして、俺はその車と衝突する直後に意識が飛んだ
そしてこの真っ白で何もできない謎の空間にいた

「だれかいらないのかー」

ために、大声で呼びかけるが返事はない
どうしたものかと考え始めた時

「なんじゃ」

!!!

後ろから声が聞こえたが後ろをむくことはできない

「悪いけどさなぜか動けなくてそっち向けないんだけど」

「おお、そうじゃった、ほれ、動けるようになったじゃろ」

「ふう、あ、本当だ」

しかし、なんでうごけなかったんだ？」

「それはの、ここは許可なしで入った者は身動きできんようになつとるんじゃ」

明らかにおかしいだろ、俺は好きでここにきたんじゃないし、なぜここにいろのかすら理解できてない

「それは最もじゃ、それとなぜここにいるんじやったな、それはなわしの部下のミスでな、お主を誤ってころしてしまったんじや」

「へえ、……えええええええええええええええええ！」

「なんじゃ、喧しい奴じゃのう」

「嫌ね？普通に寿命がきて死ぬのはわかるけど間違っ
て殺されるっ
てどういうこと？それとあんただれよ」

「わしはお主らが言う神様みたいなものじゃ」

ん？この流れなんか聞いたこと？が」あつた気がする

「そうじゃ所謂テンプレじゃ」

「おおメタ乙、テンプレなら、なんだ？転生でもさせてくれんのか
？」

「そうじゃ」

「おお、まじで？あのSSとかよくある奴？」

「そうじゃよ、さっそくじゃが、願い三つと世界を言うがいい」

「なら、まず身体能力MAXで、あらゆる状況化でも生きれるよう
にしてくれ」

「ほう、なかなか面白いのう、あと一つはなんじゃ？」

「じゃあ、戦闘能力っていうかセンス？を極限まで」

「ふむ、では世界を言うがいい」

「世界はモンハンの世界」

「む、なるほどだからこの願いか」

「そうだよ、だって結構自由に生きれるじゃん」

「違うのう、しかしわしは不老とか言っと思ってたんじゃがのう、面白い奴じゃ、もしわしの思った通りだったらさっさと決めて落とすつもりじゃったが、予想外だったからの、特別に扉にしよう。ほれ後ろに扉があるからそこを抜けるがいい、抜けたら意識が無くなり、生まれると思うからな」

「おお、俺運がいいな、それとご丁寧にありがとな」

「まあこちら部下のミスだし、お詫びもいいところじゃ、元気でな」

「ああじゃあな」

そして俺は扉をくぐりぬけた

プロローグ（後書き）

次は設定です

設定（前書き）

設定です

これは物語が進むごとに増えます

設定

主人公

人間の時の名前：黒乃龍斗

性格：たまに冷静で、たまに熱血、常時はマイペースな感じ

好きなこと

寝る、食べる、体を動かすこと

読書

嫌いなこと

頭を使うこと

嫌いなもの

正義という言葉

今作の主人公でジンオウガになってしまった人、実力は基本はかなり強い、神様にもらった戦闘センス最強のおかげでジンオウガで最強レベルである

イビルジョーとか、一応古龍にも勝てるが運が左右することの方が多い

唯一のジンオウガには無い物もある、それはなぜか電気のビームをだせることと尻尾を使ったソニックブームをだす

しかし、さすがにアカムやウカムといった竜には勝てないがそこ
で差はない

設定（後書き）

では、次回

一話（前書き）

考察時間5分、修正時間2時間

モンハン書きやすいです、あと省略しすぎた

一話

俺の目の前にジンオウガがいる、狩りにきたんじゃない
俺は生まれたがその親がジンオウガだった、そして俺自身もジンオウガだった

あのさ、たしかに身体能力とあらゆる状況化でも生きれるようにしてもらっているけどさ

人間じゃないってだれが予想できる？

でもよくよく考えてみれば転生だし、絶対人間に生まれるとは限らないし、そこを今嫌がってもあれだし

でも、これでいいと思う　なぜなら

ジンオウガってかっこいいからだ！

この間5分

閑話休題

そして生まれて10年くらいたった

え？いきなり飛ばしすぎ？

やめてくれ思い出したくもない、言い忘れたが俺は高校生だったわ

けだからいまさら赤ちゃんプレイとか羞恥心で死ねる

そしてなぜか生まれて5年で、十分以上な力があつた

なぜか、アオアシラの半分くらいしかない（四つん這いで、まあ普通な態勢）に力で圧倒した

なぜアオアシラと遭遇したのか、それは単純にはぐれただけ

そのあとお袋？にちゃんと合い、しとめたアオアシラを食べた、最初のころは気分が悪かった

しかし、この自然の中で生きるにはこれに耐えられないといけなから、我慢し続けたが

慣れとは恐ろしい、もう食べることに抵抗がなかった

10年、この十年間は時間を見つければ狩りの練習と力の効率の良い動きの練習だ

スパルタだったこと戦闘センスMAXもあり、今はお袋に圧勝可能なほど成長した

そして生まれて15年がたった

大きさはまだジンオウガとしては小さいが、ちゃんとした成体である

お袋は普段は厳しかったが、いざ離れるとすると悲しい気分になる

俺はすこし、悲しかったが俺は自由に生きれることを喜んだ

俺は親から離れて、2年たった、今はまだきまつた縄張りがない、
ほぼ旅も当然の状況だ

この二年間は非常に濃かった、ある時なぜか砂漠にいて、ティガレ
ックスと遭遇したり、ディアブロスにも喧嘩売られたりした。

勿論ティガレックスはちゃんとしとめた、ディアブロスはさすが暴
君と呼ばれるだけあって、撃退が精いっぱいだった

そしてところどころにある、オアシスに寄りながら、自然のある所
を探した

砂漠で1年間過ごしてしまった、やっと見つけた湿地帯、そこで俺
はしばらく体を休めようとした

しかし、ナルガクルガとその亜種に見つかり戦った、しかし軽く電
撃を飛ばしたら一発で目を回してしまった

食べようとして近づくと、腕部分の刃の部分を見た、軽く叩いたり
して気がついた、これ骨だ

だからか、と納得した、骨を伝って電気が脳に直撃したも当然だ、
そら一撃だろうな

ひとまず食べれる所を探したが、食べれる所が少なすぎるし、食べ
ただけで食った気がしない

そして俺は、ある森林で落ち着いた 既に体の大きさはジンオウガで銀冠ほどの大きさだ

最初は見て驚いたのが、ここはモンハン3rdのところだ、時期もあつて、綺麗な紅葉だ

ひとまずは落ちついた、ここを縄張りにしようと思った

しかし、ここには既に別のジンオウガがいた

俺は、やっと見つけた自分にあつた所だ、力で奪い取ることにした

相手のジンオウガは俺の殺気を感じて戦闘態勢にはいった

俺は先手必勝とまでに、前足を相手の頭めがけて振り下ろした

相手は驚きながらも避けた、そして明らかに逃げ腰になつてゐる

なぜか、それは簡単だ、俺が振り下ろした所が少し大きいクレータ―ができてゐるからと、俺の体の大きさだ

相手の方は、力の差をわかったのか逃げつていった

俺は同族との戦いを経験してないから、少し期待してたが期待はズレだった

しかし、さすがに無双の狩り人と呼ばれているほどの竜だけある、引き際を見極めてゐる

無理して戦い、勝てたとしても自分もただじゃすまないからだ

俺は自分の種族を少し誇りに思った

そして、ハンターがこの縄張りに侵入してくるのは5年後だった

一話（後書き）

感想お待ちしています

2話（前書き）

思考時間20分 修正時間1時間

結構時間を飛ばしまくりますが、なんか戦闘ばかりですが基本的日常を番外編で入れたいと思います

遅れましたが、この物語は

2話

あれから、二年たった 俺は、あの時よりも強くなり体も大きくなった、大きさは金冠の一番大きいぐらいだろう

それと、この二年間わかったことがある、俺はなんでかやろうと思えばいつでもすぐに超帯電状態になれることだ

最初はチート？と思ったけど縄張りに侵入してくる奴が強かった、イビルジョーが一カ月間隔で侵入してきてる

最悪な場合、二匹か三匹を同時に相手しなければいけない時がある、この時は逃げたかったが

片方必ず小さいのがいたからだ、子供に狩りの仕方を見せようとしてるのだろうか、だが俺を狙ったのが運の尽きだった

これだけではわからないと思うから一つ例をだそう、親一匹と、ちび一匹の場合の戦闘だ

最初に電撃を飛ばして少しずつ蓄積させながら中距離戦を展開してた、そしてある程度しびれ始めた時に、飛びかかり

首めがけて全体重を乗せた、右腕を叩きつけた。この一撃でハンマーの気絶の状態になった

俺は即座に尻尾を回して空に大ジャンプをしてそこから、左腕を叩きつけた。ついでに爪も突き立てた

そしてこの一撃で親のイビルジョーの首をへし折った。少しピクピクしてすぐに動かなくなった

そして子供の方は親がやられて逃げて行ったらしく見当たらなかった

そしてその子供はジャギイの群れに襲われたらしく、ほとんど原形の残ってない死がいがあった

とまあこんな感じだった

他の時は複数を相手にするんだが、なぜか仲間割れみたいなことが起きてたからよかった時と

協力してくる時があった、まあどっちみち攻撃が味方にあつたたりして仲間割れして味方食つたりしてたし

まあこんな感じが主だったむしろこれ以外ない

そう、こんな感じで二年間たつたわけだが、何やら異変が起きたらしい

知り合いのジンオウガが逃げてきた、聞いてみると逃げてきたらしいが何があつたのかはわからないと言つてた

俺は少し興味ができたから行ってみることにした、この縄張りはずいつに任せたが力は下位のジンオウガだから心配だ

本人は死なない程度にがんばるといつてた、死なれると俺の数少ない知り合いがいなくなるから俺はそれを頼んだと言い向かうことにした

あれから数日がたった。俺はある山を登ってる、さっき言った知り合いの山だ。

近づけば近づくほど雨が強くなる、風も強い、その時俺は何か思い出した

たしか、これアマツじゃね？

俺は今恐ろしいほど逃げたくなってきた。古龍とは合うことはなかったが力はすさまじいとは聞いていた

ゲームだと普通に倒せるけど、こうリアルになると改めてハンターってすげえなー

ひとまず帰るか、そう思った直後入ってきた道が崩れた。

明らかに俺の存在に気付いたから逃げださないようにしてあるようだ

前に進むしかないようだ

俺はそう渋々前の唯一の道を進む、そして頂上が見えてきた時、すごいプレッシャーみたいな物が俺を襲う

倒れそうだったが、なんとか自分に頑張れやればできると某炎の妖精の応援を自分に言い聞かせて向かう

そして頂上にきた時目の入ったのは、明らかに水の生物を意味しそうなヒレとかヒレとか、そして空を泳ぐように飛ぶ竜

アマツマガツチ

リアルで見るとすげえけど最初に思ったことは、「あ…………俺死んだ」って思ったよ

しかもあいつ俺を殺す気満々だし、だめで元々だ。返り討ちだと自分を奮い立たせた

まず、自分より力のあるのが相手の場合はこちらから攻めるより力ウンターを狙う方が効率がいい、相手が自分より質量がある場合はたたみかけるより自分の土台に持ち込めればどうとでもなる

相手は俺を見下しているはずだ。それとあいつのウォーターカッター？の時に電気を当てたらなんとアマツの方に流れて言った

たしかに電気とは言え、虫が元なんだけど存外いける物だ

しかしあんまり効果が見られない

俺はこの通常状態だと勝ち目がないと思った。しかし超帯電状態になるには数秒間必ず隙ができる

通常とは違う吸収の仕方だけど、一気になる方法がある、どう言う原理か、思いつきり吠えろと

体の表面に付着してる虫が一気に強くなり、通常の虫より遥かに協力的な虫になる

しかも自分でところと思はない限り解けない、まさにチート

あとついでこの状態になったら、なぜかソニックブームみたいなものが出るようになる

しかし、相手は古龍だ。俺が吠える間に攻撃してくるかもしれない隙を少しでも見せれば一気につぶされると思う、どうするか……と思った

そこで俺は思いついた、また前みたいに少しづつ蓄積させていけばいいんだと

考え付いたら即行動だ

長くなったので省略、え？なんでだ？だって同じこと繰り返してんだよ？

閑話休題

やっと、動きを鈍らせるまで来た。もう明らかにフラフラのアマツが大きく空を飛び俺から離れようとする

俺はそこで俺に警戒を緩めたのを見逃さず、一気に吠えた

しかし俺が吠えると同時にアマツは逃げていった、遥か遠くに行ってしまった。そうかこれはリアルだった、ゲームだと討伐しかできなかったし

俺はもうボロボロ、爪は折れ、角は片方折れ、顔に浅いが傷がある

俺は引きずるように縄張りに戻った

一週間かかって縄張りに戻ってきた、そこで見たのは丁度討伐された知り合いだった

俺は怒りで殺しに向かおうと思ったが、体が言うことが聞かなかった

俺はそこを離れて、ある意味一番信用してる友達の所にむかった

その友達は、ディアブロス、あの時撃退が精いっぱいだった奴だ

場所は砂漠だが、かなり大きい自然のあるオアシスのあるところだ

2 話（後書き）

はい、いきなりアマツでした

なぜいきなりアマツなのか、それはアマツは既に着ていたんじゃないか

そう思ったのです

あとアンケートもどきですが、これからだすモンスター、ディアの名前を決めたいので誰か、案をお願いします

三話

縄張りを追われて半年たった。

あれから、俺は自分の回復を優先しながら砂漠を目指した

しかし、俺は運が悪いのか途中にイビルジョーに出会ったり

クルペッコに出会い、リオレウスを呼ばれたり

そしてやっと砂漠に入るとベリオロス亜種に遭遇したりした

最初は砂漠を間違えたか？と思ったがよく考えると砂漠って結構広いから縄張りの区分があると知った

途中にアイルーの行商隊に出会ったがなんと話が通じたのだ

そこで知ったのは俺の異名と、知り合いのディアブロスの位置だ

因みに俺の異名つか知られてる呼び名は「神狼竜」が主な呼び名で他のジンオウガ達の尊敬の存在らしい

そして他には「巨狼竜」と「天を退けし狼王」だそうだ正直最初のはまあ恥ずかしいが良いとして

二つ目は見た目まんまで、三つめはさらに問題だなにこの厨二の名前みたいなの（厨二は大好物キリッboy主）

それと天を退けしって、あのアマツか間違いではないがどうもしっ

くりこない

しかし、この呼び名よりもびっくりしたのが、あのディアブロスなんか朱色らしい、いやどちかというと紅に一番近いらしい

それとあの時の傷がまったく治らないのはなんでだろうか、今の傷の状態は角はやっと治ってきていて、爪が全然だ

そして顔の傷はむしろ傷跡が綺麗に残ってる。

モンスター同士の戦闘では、傷が多くて生きていれば歴戦の戦士と言われている。そして尊敬される存在である

なぜ尊敬の存在なのかは、戦闘においてハンターに狩られる時の方が圧倒的に多いのだ

だから傷が残りながらも生きていればハンターを撃退もしくは返り討ちにし、モンスターの縄張り争いで戦い逃亡か勝ったかだ

逃亡だと、弱虫とか弱者とかあるが傷だらけでいるとすると自分より力のある者に勇敢にも立ち向かい負けた。

十分な勇者だ。そしてモンスターで狩り人と称されるジンオウガでは逃げることは恥ずかしいことではない

むしろ誇るべきだ。モンスターの弱肉強食の世界では生きることが最優先事項なのだ

閑話休題

気がつけば、言われた砂漠まで来ていた。

砂漠に入って早2ヶ月たった。オアシスを見つけてはそこでたったり水を飲み、そこにいたりノブロスを食べながら進んできた

そして縄張りに入った瞬間周りの空気が変わった。

そして徐々に近づいてくる地響き

次の瞬間、目の前に巨大な砂が散りその巨体は現れた

俺とほとんど大きさは変わらない（主人公がおかしいだけです。ディアブ羅斯は普通です）

「おう、なんだお前か どうしたんだ？こんな所に遠かったんじゃないか？」

実は最近になって気付いたけど、俺他の竜種と話せるようになった

「ああ実は色々あってなそれと結構疲れたからな、どっか落ち着ける場所に案内してくれないか？」

そう俺が言つと俺の傷に気付いて

「わかつたいいだろう。こっちだ」

そう言い俺を案内してくれたのは、日陰もあり、オアシスもある最高に位置だ

俺は水を飲み、すこし落ち着いた時

「でっお前どうしたんだ？」

「実はな……………」

俺がここに来た理由を言っていると顔をしかめた。おいおい、顔がさらにこつくなつたぞ（もとからです）

「そうか、それにしても古龍に喧嘩売るとは無謀も良いところだな」

「そうかもしれないがな、友の話を聞いたら好奇心でな」

「そのままだと好奇心に殺されるぞ」

「はは、違うない」

「そいえばお前って異名ばっかで本当の名前ないよな」

「ん？言つてなかったか？俺はクロノだ」

「クロノか、俺はデゼルトだ。俺達一応友同士なのに名前も知らなかったんだな」

「それは作者の都合だ」

「メタいことを言うな」

「まあそれは置いといて、俺の怪我がある程度治るまでここにいていいか？」

「ん、まあいいだろう。ただし餌は自分でなんとかしな」

「ああ、わかってるそれとありがとう」

「いいてことよ、友の頼みと聞いたらできる範囲のことはやるのが俺だしな」

「俺は良い友をもったよ」

「よせやい、照れるだろうが」

そして俺はこの砂漠に2年過ごすことになった

傷は二年でほとんど治ったが、顔の傷は完ぺきには治らなかった。多分完全に消えることはないと思う

俺はこの二年の間にまた大きくなった。既にデゼルトよりも遥かに大きくなった

デゼルト曰く「お前ってそのうち古龍認識されそうだな」だそうだが否定できねえ

クロノがハンターに襲われるまであと二年半

三話（後書き）

はい、三話でした。

次は土日のどっちになります

では名前案と感想くれた星屑さん、本当にありがとうございました。

では、感想とかをできればよろしくお願いします。

自分は感想をくれると元気百万倍になるので

では次回合いましょう

4話（前書き）

一万PV突破しました！
本当にありがとうございます！

4話

俺は一カ月かかって縄張りに戻ってきた

そこにはドボルベルクだった、結構でかいはずんだけど俺の気の精だった（ 本人がでかすぎるだけです）

戦闘したが背中デコボコしたなんか変なのを一撃したらめっちゃくちゃ痛がってた

リアルだと結構グロいです、いまさらか

血が結構出てる、なるほどだから弱点だったのか、おそらくほっといたら血は止まるだろう

だが戦闘中にそんなことすればたたみかけられるだろう

隙を見せないつもりだろうが、フラフラだ

血を出し過ぎたんだろう

そしてある程度弱ってきたようなのだ。頭部に一撃したら角は折れ、頭は地面に沈んだ

そしてこいつは見た目からしてあれだがじつはかなり脂肪の塊なのだ非常に食べがいがあるのだがその時

「がああああああっっ！！！！」

ディガレックスが降りてきた、なぜティガがここにいるし

お前は、砂漠とか、雪山が本来の分布だろうが

しかしよく見ると傷だらけだ。弱ってるし結構小さい、ひとまず話かけてみた

「何者だ、ここになんの用だ」

「ひう、いえ実は、縄張りを追い出されて、この主は狩られたと聞いたので」

なるほど、まああいつは留守番だったけどな

「なるほど、ならここにいい」

「本当ですか！」

「本当だとも、俺も一時期ここを離れててな、最近戻ってきたのだよ」

「だとするとあなたが、この本来の主ですか、ん？その顔の傷は……」

「ん？ああこいつはある古龍を撃退した時の傷だ」

「！！、あなたが神狼竜………ですか！お会いできて光栄です！！」

なんだかなー、うっとうしいな

「五月蠅いぞ、ここに住むのいいがここは村に一番近い所だ、狩られないように気をつける」

そう、ここはあのモンハン3rdの所なのだ、ただ似てるとかじゃなくてここなのだ

「は、はい！」

良い返事だが、その傷は誰に付けられたのか

「それはそうとその傷はどうしたんだ？追い出されたのならその傷はわかるが誰に…」

「はい、私は雪山のあたりに住んでたんですが、ある変な電気の奴にやられました」

ギギネブラか

「ふむ、なるほど、今度行く機会があるなら狩って置こう」

「ありがとうございます、そいえば名前はなんですか？自分はグラニトン（暴食だったはず）です」

「俺はクロノだ、よろしく」

「よろしくお願いします」

なんかいきなりだが、ティガレックスのグラニトンが仲間になった
みればまだ小さい、大きくなれば化けるだろう

それと、確実にこいつが飛んでいる時を目撃されただろう、いつか
ここにハンターが来るかもしれない

ある程度鍛えておかねば

しかし、疑問が残る。ティガレックスは絶対強者と呼ばれた竜だ

その竜がなぜ、逃げ腰なのか、まだ親離れして間もないのか？

いや、違うなこのティガレックスはどこかおかしい

親離れしても逃げると言う選択肢は、普通はない

無謀にも戦い無様にやられるはずだ

しかしそうじゃない、なんだろうこの違和感は…………

何もなければいいが……

余談だが、このティガレックスは女の子だった

4話（後書き）

はい、遅れました、つか間違えて消してしまつて、遅れました

それと新しいオリキャラ ティガレックスのグラニトンです

たしかキリストの暴食から取りました、そのまんまのはずですが忘れしました

それとやっと冬休みに入りましたからある程度更新は早くなると思います

それと、もうすこしハンターがきます

ハンターのリーダー各は自分のキャラです。

他は自分のハンターギルド（笑）の方々です、

いきなりですがG級の方々です、自分の知る限りは最強の方々です

では次回で会いましょう、あと感想とか待ってます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2886z/>

雷狼竜として生きた者の物語

2011年12月21日22時50分発行